



つながる、つなぐ発見

厚生労働省「令和4年度埼玉県障害者芸術文化活動普及支援事業（特色型）」ART(s)さいほく報告書

社会福祉法人 昂
ART(s)さいほく
ART(s)さいほく



目次 index

はじめに	2
地域との連携・協働	3
事例① ☆アート展☆嵐山☆	4
事例② 日高市障がい者創作活動合同作品展	5
事例③ 第2回障がい者アート展 in おごせ	6
自主事業 - 埼玉県北西部エリア公募作品展 -	
アートセッションズ in さいほく 2022	7
ソラジローさんインタビュー	8
個人作家の発掘及び支援	9
☆アート展☆嵐山☆出展者沖さんインタビュー	
人形作家せきぐちなおこの楽しい布人形の世界展	10
基幹センターとの連携	10
埼玉県障害者アート企画展 Coming Art 2022	
南関東・甲信ブロック広域センターとの連携	11
合同企画展「カウンターポイント・それぞれの寄り添うかたち」	
地域の取り組みの紹介 鶴ヶ島市立中央図書館	13

ART(s) さいほく (埼玉県 / 特色型) とは

ART(s) さいほく (特色型) は社会福祉法人昴を母体とし、埼玉県で2つ目の支援センターとして、主に埼玉県北西部をエリアに障害のある人たちのアート活動支援を行っています。

※【特色型とは】アートセンター集 (基幹型) と連携し普及支援事業の推進に当たり有効性、必要性及び特色等が認められる事業)

はじめに

今年度もコロナ禍の影響は甚大で、多くの人々が集合しての催しを企画する際は感染状況を注視しながらでした。昨年度と比較すれば、さまざまな創意工夫の蓄積もあり、新たな取り組みも実現できました。それらは地道な取り組みではありますが、障害のある人たちの文化芸術の普及に寄与できたと感じています。

とりわけ、埼玉県北西部の自治体を回って丁寧な説明を行ったことにより、自治体における障害者の文化芸術への理解を促進する足掛かりを作ることができた一年でした。

また、自治体との連携により、各地域にはまだ知られていないだけで多様な芸術活動に取り組んでいる人たちはまだまだいるという手応えを得ることができました。その方たちは発表を前提とせず、日々の生活の一部として途方もない時間をかけて制作を行っているのです。そうした生活に根差した文化芸術活動「アール・ブリュット」にもより一層深い眼差しを向け、その価値を見出す取り組みを続けていきたいと思った一年でもありました。

さらに、一人一人の暮らしがより豊かなものになるよう、発表の機会の創出にとどまらず、障害のある人たちがもっと文化芸術に触れる機会を持てるよう支援していきたいとも感じています。そのためにどんな合理的配慮が必要か意見を交わすことにも今後取り組んでいきたいと思えます。

ART(s) さいほくの活動にご協力をいただきました皆様に感謝を申し上げますとともに、共生社会実現のため障害のある人たちの文化芸術活動がより一層認知され、広く社会に根付くよう当法人も尽力して参ります。

社会福祉法人昴 理事長 丹羽彩文



地域との連携・協働

これまでの課題

これまでのART(s)さいほくの取り組みを通じて感じているのは、地域の中でART(s)さいほく（支援センターおよび普及支援事業）の存在がまだまだ知られていないことです。当センターは福祉事業所内にあることから福祉事業所とのつながりや協働は多いのですが、行政や地域の団体等とのつながりや協働の機会は多くありませんでした。

また、令和元年から2年にかけて地域の作品展の実施協力を行う中で、地域にはアート活動に取り組んでいる事業所や在宅の作家が数多くいて、発表の機会や活動の場を望んでいるということがわかりました。しかし、作品を地域で発表する機会はまだまだ少ないのが現状でした。

新たな取り組み

そうした地域の課題に取り組んでいくためには町行政との連携が大切と考え、今年度は当センターの存在の周知と普及支援事業の理解促進を目標に、市町村役場（主に障害福祉担当部署）を訪問し、直接説明を行いました。

その際、「支援センターの存在を知らなかった」「どのように活用してよいかわからない」という声も多くありました。しかし市町村の障害者作品展のサポート実績などを説明したところ、わかりやすい支援センターの活用事例として、理解を得られました。

新たな一歩

その成果として、今年度新たに嵐山町より障害者作品展の実施協力の相談を受けました。その後町と連携しながら福祉事業所や作家同士の顔合わせ会を行うなど、模索しながら☆アート展☆嵐山☆の実現に向け準備を進めました。これは、当センターにとって地域の事業所の活動を知る有益な機会になりました。また行政の協力を得たことで、当センターだけではできなかったであろう在宅の作家や事業等へアプローチができました。

気づきと展望

このような行政へのアプローチは普及支援事業への理解を進め、支援センターの活用につながるという手応えを感じています。同時に、行政側から様々な情報を得て、課題も知ることができました。このことから、私たち支援センターも受け身ではなく、地域とどのような連携や協働が可能か自らイメージし、積極的にアプローチしていくことが重要だと感じました。

今後も引き続きフットワーク軽く、地域性を活かした取り組みをしていきたいと考えます。

嵐山町との連携

☆アート展☆嵐山☆
2022/12/9（金）～12/12（月）
嵐山町ふれあい交流センター
来場者 266名（+@）



☆アート展☆嵐山☆が実現するまでの流れ

- ①【嵐山町からの相談】2022年9月
今年度は新たに嵐山町より、これまで実施していた障害者作品展をブラッシュアップしたいという相談を受けました。
- ②【提案・交流の場の創出】顔合わせ会2022年11月
作品展実施に向けて嵐山町より町内各事業所および個人作家に呼びかけを行ってもらい、顔合わせ会を実施しました。そこでは各事業所の取り組みや作品の紹介などが行われました。それによりお互いの活動や作品のことを知る貴重な交流の場になりました。
- ③【展示サポート・展示方法のアドバイスと作業】2022年12月
展示作業は町職員や出展事業所のスタッフが協力しあい行いました。作業はアイデアを出し合いながら進め、みんなで作り上げた展示は、見やすく楽しいと好評を得ました



顔合わせ会の様子

【嵐山町担当職員からの声】

本作品展は、障害がいのある方とない方が楽しい雰囲気でも自然に交流できるような場にしたいと考え、支援センターに相談しました。

今回は、支援センターより良い雰囲気での展示用ツールと展示法のアドバイス等を受けることができ、今までの嵐山町の作品展で出せなかった明るくおしゃれで来場者がわくわくするような空間ができました。

展示をする際に通所事業所の利用者さんも楽しい雰囲気で行って来て、展示や片付けについても楽しみながらでき、とてもよかったです。

多くの作品を出展してくれた80代の男性が開催中毎日会場に来て、作品の解説をしてくれたので、来場者も喜んでいました。今後はもっと多くの出展者がご本人の作品について質問を受けたり解説したりする機会をつくり、来場者と作者とのコミュニケーションがある作品展にしたら楽しいのではと考えています。

嵐山町社会福祉課 野澤さん



☆アート展☆嵐山☆の準備の様子



入間西障害者基幹相談支援センターとの協働
日高市障がい者創作合同作品展
 2022/12/2 (金) ~12/4 (日)
 総合福祉センター『高麗の郷』
 出展作家 12 名
 来場者 約 200 名



入間西障害者基幹相談支援センター主催による作品展への協力も4回目を迎えました

この作品展の大きな特徴は日高市の相談支援センターが主催となり、同市内・エリアにおいて普段あまり人に知られることなく、コツコツと自分なりに創作活動を続けてきた障がいのある方を対象に、計画相談支援で関わり合う相談員が協力し、創作活動にける思いやその人らしさ、背景や歴史も作品と一緒に紹介していくところです。

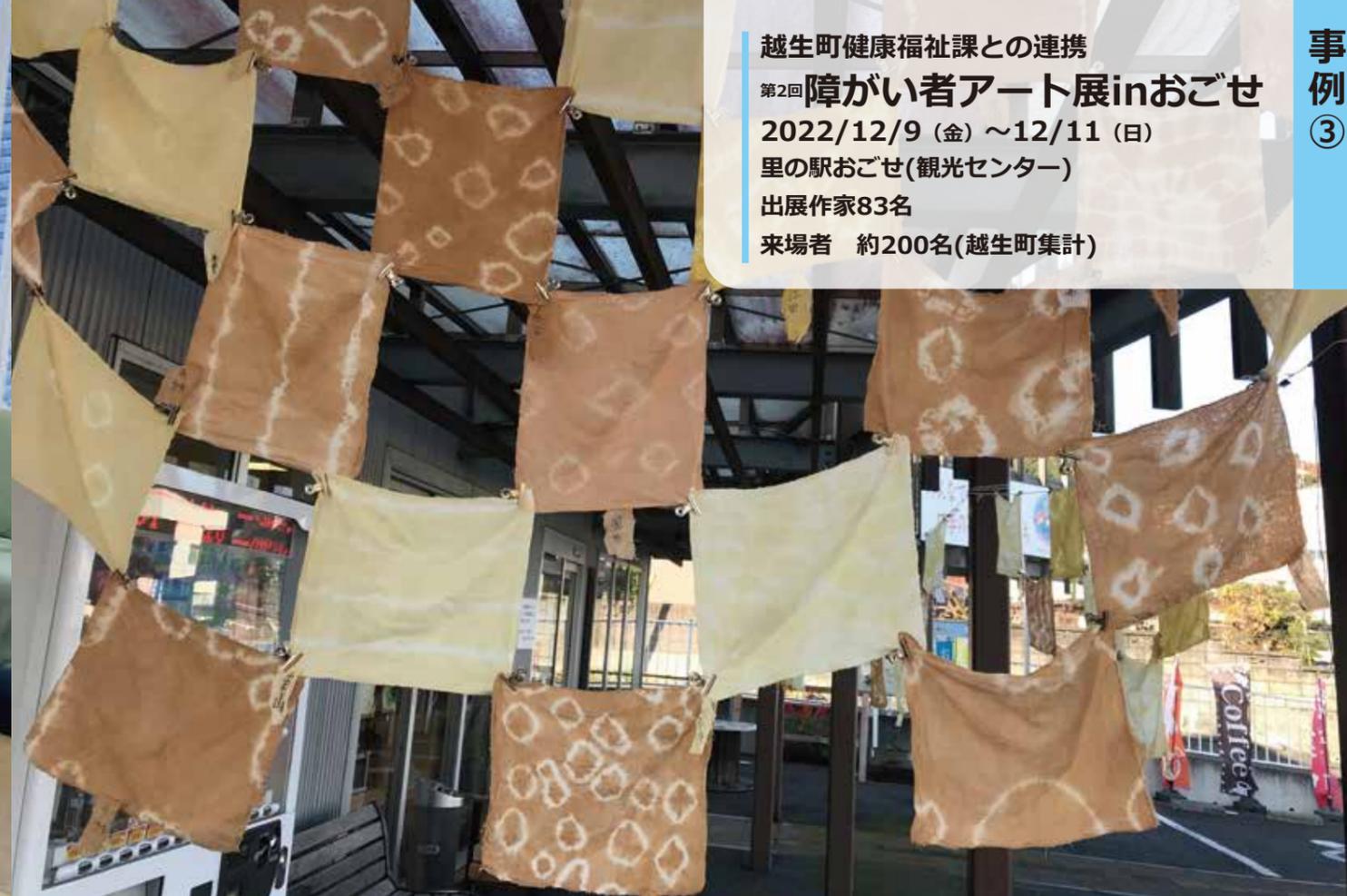
今年も作者や支援者が事前に集まり作品についての説明や意見交換等が行われ、支援センターは展示プランを提案、什器の製作などを行いました。展示作業は作者、職員、ボランティアが参加し行われました。



作者・関係者の声

- 人に見てもらふことはとても嬉しく、できれば多くの人に見てもらいたいです。
- 自分の作品を誉められたり、評価されると、自信にもなります。
- 直接だとなかなか自分の思いは言えないが、作品を介しての方が自分のことを伝えられる。
- 作品を見てもらふ機会は少なく、家族だけになってしまいがちです。身近な人や広く知ってもらふことで、本人はどんどん自信になります。

越生町健康福祉課との連携
 第2回 **障がい者アート展 in おごせ**
 2022/12/9 (金) ~12/11 (日)
 里の駅おごせ(観光センター)
 出展作家83名
 来場者 約200名(越生町集計)



■ 昨年に引き続き、障がい者アート展 in おごせの展示サポートを行いました。

【越生町担当職員からの声】

出品していただいた作品は、大変驚かされるものばかりでした。普段から作品を作っている方もいれば、今回のアート展のために作品を作ってくださった方もいらっしゃいますが、どの作品も作者の思いが強く伝わってくる作品でした。心のなかに秘めている思いがあり、その思いを表現したいという気持ちは、障がいの有無にかかわらず共通なことだと改めて認識することができました。作品を出品していただいた方の中には、普段お会いしている方も多くいましたが、意外な一面を知ることができたような気がして嬉しかったです。また、居住地の近くで作品を発表する機会がなく、越生町のアート展に出品してくださった方もいらっしゃいました。その方の保護



者が「今までは作品を作るだけだったが、アート展で来場者に見てもらふことが出来て嬉しい」とおっしゃっていたのを聞いた時は、開催して良かったと思いました。

展示レイアウトを工夫したことで、作品の良さを引き立たせることが出来たと思います。作業は大変でしたが、楽しく準備することができました。

来場者アンケートでは「良かった」「素晴らしい作品だった」等の感想を多くいただきました。町としても、「障がいのある方に自己表現する喜びを体験していただく」というアート展の趣旨を、少しでも達成できたのではないかと自負しております。

越生町健康福祉課 吉田さん

自主事業 - 埼玉県北西部エリア公募作品展 -



アートセッションズ in さいほく 2022

2022/11/10 (木) ~ 11/13 (日)

小川町立図書館

来場者 388 名

埼玉県北西部エリアの障害のある人たちを対象にした公募作品展です。

新型コロナウイルス感染拡大により中止を余儀なくされてきたアートセッションズ in さいほくでしたが、ようやく開催できました。今年度は73名(18事業所より67名、個人作家6名)の応募がありました。

開催中はギャラリートークも行い、作品や制作の背景などを伝える機会も設けました。

作品展には、作者ご本人をはじめご家族、事業所のスタッフや利用者さんがともに来場し楽しんでいました。作品をはじめて発表する方も多く、その嬉しさを周りの人たちと共有することもでき作品制作がより楽しみになったという声がたくさんありました。本作品展は作品の魅力の発信とともに、作者ご本人にとって喜びややりがいに繋がる一助になればと考えています。

来場者の感想

- 豊かな表現、自由な発想にワクワクしました。次回も楽しみにしています。
- もっと長い期間の展示で多くの町民に観てほしいです。
- 地域の中でその土地に合わせた展示になっており、その作品のストーリーまで話していただける機会としても有意義でした。
- 自分も可能性をいっぱい持って楽しみを持って生きようとエネルギーをもらえました。
- このような素敵な力をもっともっと私たちの施設でも引き出していきたい。
- 作品を作った皆様の楽しそうな日常が思い浮かびます。



はじめての出展をしたソラジローさんに聞きました。

ソラジローさんが作るのはバスのペーパークラフトです。バスが大好きで市内を走っている路線バスをはじめ様々な種類のバスを制作。内部やドアの開閉ギミックなどを細かな部分まで再現され「バス愛」にあふれた作品です。発表以前は家で遊んだり眺めたりしながら楽しんでいただとのことです。



アートセッションズ in さいほくがはじめての発表の場となったソラジローさん。出展に至るまでにはいろいろな気持ちの揺れがあったようです。

出展から出展後までの気持ちを聞いてみました。

作品を出そうと決めた時の気持ち

一母に出してみないかと言われたが、よく分からなかったのとつまらないと思われたら嫌だなと思って最初は出さないといいました。少し考えてやっぱり物は試しで出してみようと思いました。

作品を出すまでの気持ち

一作品展に出すバスを選んだり、展開図を用意しているうちに、作り方もみんなに知ってもらいたいと思いました。作品展の為に説明書を用意したり、準備がだんだん楽しくなってきました。

展示を見た感想

一作品展の実際の展示を見に行った時に、バスの作品を見てびっくりしている人や質問してくれる人もいて嬉しい気持ちになりました。

これからの展望

一今の作品にモーターや室内灯やヘッドライトをつけてみたいです。



個人作家の発掘および支援

事業所に属さず個人で創作活動をしている方を取材したり、個展を支援したりしました。

発掘 ☆アート展☆嵐山☆出展者 沖さんインタビュー

沖さんは50代に脳梗塞を患い後遺症で右半身に麻痺が残りました。退院後に奥様お手製のお手玉でキャッチボールなど様々なリハビリをする中、モノづくりにも取り組もうと思いつき、以来84歳になる現在まで数多くの作品を作り続けています。

古民家のミニチュア作品はとて迫力があるうえ細かなところまで再現され、とても見応えがある作品となっています。その作品制作についてご自宅を訪問しお話を聞かせていただきました。



古民家のミニチュアを作り始めたきっかけは？

一もともとプラモデルなどを作ることが好きでしたし、勤め先に宮大工の方がいて建築にも興味がありました。町内のお祭りがあり、そこで作品を発表しようと思い、リハビリも兼ねて大きなサイズの古民家のミニチュアを作り始めました。ミニチュア作りのために、旅行先で訪れた合掌造りの家の図面をその場で描いたこともありました。

沖さんのモノづくりの流儀を教えてください。

一材料は近所の神社などで落ちている枝などを拾ってきたり、知り合いの大工さんから廃材をもらったりしています。『何か使えるかもしれない』と、落ちている木の枝や廃材をいろいろな角度から見ます。するとイメージがわき、どんどん作業の手が進み、形になっていきます。市販されている材料を使う場合も、ひと手間加えると、面白いものになります。普段気に留めないものも『何か使えるかもしれない』とよく見ると、なにが面白いものに見えてくるんですよ。

創作の原点は？

一高校を卒業して職業訓練所に行ったとき、その先生に『電車の中で寝ても耳だけは聞こえるようにしておけ。何かあったときに無駄にならないから。』って言われたんです。それを、ずっと守ってやっています。どこに行ってもぼーっと見て歩くことはありません。どんなものでも、こうやって、ずーっと見ていたら、何か身になるかもと思いつきながら見て回っているんですよ(笑)。

取材の感想

取材の際は奥様も加わり、いろいろなエピソードをお話しくださり、終始笑いが絶えませんでした。

沖さんは帰り際にも次の作品の構想を話してくださり、常に面白いことを考えながら日々を過ごすことの楽しさを伝えてくれました。

今回の取材から、私たちが豊かに暮らすための大切なヒントをいただきました。

支援 人形作家せきぐちなおこの 楽しい布人形の世界展 2022/7/1(金)～9/末 まちこうば GROOVIN 来場者 約100名

ART(s)さいほくでは地域の個人作家のサポート(発表の機会の創出)にも力を入れています。

今年度は、人形作家のせきぐちなおこさんの個展を開催しました。作者本人と打ち合わせを重ね、実施しました。会期中はなおこさんも在廊し来場者に作品の説明を行ってくれました。彼女の世界観はとて面白く、作者本人からの説明は大好評でした。あわせてなおこさんを講師に人形作りワークショップも行い、こちらも好評を得ました



基幹センターとの連携

埼玉県障害者アート企画展 Coming Art 2022 2022/12/7(水)～12/11(日) 埼玉県近代美術館一般展示室 I、II

埼玉県には私たちART(s)さいほく(特色型)ともうひとつアートセンター集(基幹センター)があります。当センターはアートセンター集と連携を図り、全県的な取り組みを行っています。

今年度も埼玉県障害者アート企画展に参加し、県北西部エリアの方の出展協力などを行いました。埼玉県「障害のある方たちの表現活動状況調査」および出展エントリーの情報提供および促進、また作品展の連絡調整や会場への作品の運搬など様々なサポートを行いました。

県北西部エリアにはまだまだたくさんのアート活動を行っている事業所や個人作家がおり、今後もエントリーに結び付けていきたいと考えます。



南関東・甲信ブロック合同企画展



南関東・甲信ブロック合同企画展 「カウンターポイント -それぞれの寄り添うかたち-」

2023/1/17 (火) ~ 1/22 (日)
会場：東京芸術劇場アトリエイースト・アトリエウエスト
主催：南関東・甲信障害者アートサポートセンター、
社会福祉法人みめま福祉会

本展は障害者芸術文化活動普及支援事業（厚生労働省）により、東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県、長野県、山梨県に設置されている支援センターの合同によるものです。10年にわたり活動を深めている支援センターから今年設立された支援センターまで、地域性や継続年数は異なりますが、各センターはそれぞれの地域と人に寄り添い、ネットワークを構築しながら障害のある人の芸術文化活動を支援しています。

本展では、「寄り添うかたち」をテーマに障害のある人の絵画、立体作品、演劇や人形劇などのジャンルを超えた多彩な表現と商品化などのプロジェクトに加えて、各センターと作家、施設、支援者との関係性をご紹介します。一人ひとりの体験をもとに構成された演劇、つながりを求めて描かれた手、驚くほど細密な切り絵、同じ電車のモチーフを長年描いた作品、鳥瞰写真を再現した立体富士など。展示を通して表現することと生きることの密接なつながり、そして支援者との関わりによる各地での芸術文化活動の広がりや未来について考えます。

(南関東・甲信障害者アートサポートセンター HP より)



ART(s)さいほく（埼玉県/特色型）は金澤一摩さん、コバヤシカオルさんに依頼し本企画の展示に参加しました。私たち支援センターにとっても学びの多い取り組みとなりました。

一摩さんの夢

『自分の作った人形で人形劇をやるのが夢なんです』と語る金澤さんは幼少の頃から人形作りに熱中していました。数年前に特別支援学校の先生を通じ紹介を受け、彼の初公演の場を設けるため伴走を重ねました。2020年実現した公演は多くの方から好評を得ました。その後コロナの大流行のため発表の場からは遠ざかっていましたが、本企画への出展を依頼したところ、新作ストーリーと人形作りに励んでくれ、新作「ガイコツの1日」の出展が実現しました。



つながるつながり 膨らむ夢

展示作業には本人も参加し舞台セットを組みました。残念ながらコロナウィルスの感染拡大の影響をうけ同会場での公演は中止になってしまいましたが、後日東松山市のcomeya ギャラリーさんより個展の開催の提案があり公演が実現しました。準備していた新作舞台を多くのお客さんを前に4公演も行うことができ、大盛況となりました。彼は次の舞台に向けてすでに新しいストーリーも準備しているとのこと。夢は膨らんでいきます。



東松山 comeya ギャラリーにて

カオルさんの喜び

以前コバヤシカオルさんは、自分の描いた絵は手元に置いておきたいため、作品を他人に貸すということにとっても抵抗がありました。しかし、なんとかお願いをして作品を借り展示を行ったところ、自分の絵がたくさん飾られているところを目にしたカオルさんは、それがとても嬉しかったようで、その日を境に作品を飾ることが彼女の楽しみに変わりました。



カオルさんの「相談」

その後、彼女は紙袋に『〇〇〇〇(会場名) カオルの絵』と書き、描いた絵を袋に入れ『カオルの絵 〇〇〇〇に飾ります!』と持ってくるようになります。私はその紙袋を『作品』『彼女のユニークな表現』としてずっと捉えていました。

しかし本企画のテーマでもある『寄り添う形』を考えた時に、別の見方もありうると気づきました。つまり、紙袋に描かれたことは実はカオルさんの望みであり、「私の絵を〇〇〇〇に飾ってくれないか」という『相談』ととらえることもできると考えたのです。そんなことを考えさせてくれる作品として今企画に『カオルの紙袋』を展示するに至りました。



わたしたちの使命

この合同企画展に参加したことで、作品の中には作者本人の様々な想いが込められているということに気づくとともに、私たち支援センターの大きな役割は彼らの夢や希望が実現するよう伴走を続けることだとあらためて気づくことができました。

ART(s)さいほく 石平裕一

地域の取り組みの紹介

「つながるアート展」を主催する鶴ヶ島市立中央図書館に取材を行いました。



鶴ヶ島市立中央図書館では毎年『つながるアート展』として市内および周辺市町村の福祉事業所によびかけ、作品展を実施しています。図書館という地域にとって大切な文化資源が主体となる取り組みは県北西部では大変珍しく、その取り組みの様子を伺いたいと宇佐美館長と職員の小関さんに取材を行いました。

『つながるアート展』について

つながるアート展は平成28年度より始まりました。市内および近隣市町村の事業所等に広く募集を行う形で毎年実施されています。役場や社会福祉協議会等からチラシの配布協力を得たり、直接事業所に声をかけるなどして、地域に密着した作品を募っています。年々応募も増え、絵画だけでなく立体作品も増えてきたとのことでした。

同作品展は障害者週間にあわせて開催され、あわせて市内の福祉施設の紹介パネルの掲示やバリアフリー映画会やセミナー等の開催、マルチメディア・デージー体験会、関連書籍のコーナーが設けられ画集や書籍が紹介されるなど読書に関連した企画も実施されています。

『つながるアート展』にこめた思い

取材で印象に残った言葉を紹介します。『アートはひとりひとりが感じたことの表現だと思います。障害のある人たちのアートは視点がユニークなものも多く、そこが面白く、日常の中でも見方を変えると面白いと思うものがたくさんあることに気づかされます』

『アートは障害の有無に関係なく誰でも楽しめるものだと思います。この企画を通じ様々な人がつながってほしいという思いがあり『つながるアート展』というタイトルにはこだわりたいです』

今後も市民の障害者に対する理解や関心を高めるための土壌づくりは必要と考え、工夫を凝らしながら継続させていきたいとのことでした。



YouTube

主催者としての思い

同図書館では図書館を単に本を借りに来る施設だけでなく、市民にゆっくりしてもらい、より本に親んでもらえるよう『滞在型』を意識し、様々な取り組みを行っているそうです。

今後本を通じ多様性の理解を深められる発信も考えているとのことでした。

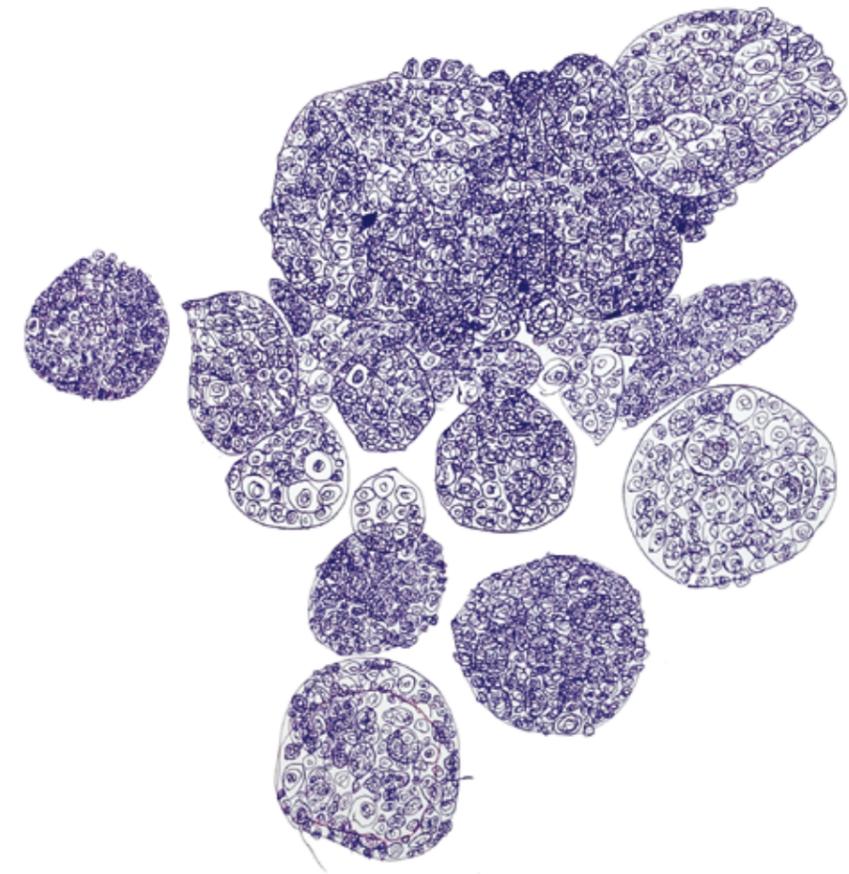


取材の感想

鶴ヶ島市立中央図書館の様々な取り組みは宇佐美館長、小関さんをはじめ図書館職員の『たくさんの人に本に親しんでほしい』という思いが基となっていることを知り、とても共感しました。

私たち支援センターも今後様々な取り組みをしていかなくはなりません、どんな思いが『取り組みの基』になっているのかを時折立ち止まって考えなくてはいけないと思いました。

また、このような取り組みが地域にあることはとても心強く、これからも繋がっていきたく感じました。まだまだ地域にはこういった資源がたくさんあると思うので、今後もリサーチしていきたいと思っています。



厚生労働省「令和4年度埼玉県障害者芸術文化活動普及支援事業(特色型)」ART(s)さいほく 報告書

社会福祉法人 昴 ART(s)さいほく

〒355-0077 埼玉県東松山市上唐子 1532-5 まちこうば GROOVIN' 内

TEL / FAX 0493-81-4597

メール arts_saihoku@subaru-swc.com

社会福祉法人 昴 HP <https://www.subaru-swc.com/>

インスタグラム <https://www.instagram.com/groovin4597/>

フェイスブック <https://fb.com/arts.saihoku/>



社会福祉法人 昴 HP



インスタグラム



フェイスブック

表紙絵 『ライオンとともだち』 新田新汰

編集・デザイン：東松山 comeya gallery + place <https://www.facebook.com/comeyaHM>